
AMIDA

クロフォード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AMIDA

【著者名】

Z5605D

【作者略】

クロフォード

【あらすじ】

皆さんが、一度は体験したことがあるだろう。修学旅行。恋の話、枕投げ・・・楽しい思い出をたくさん作つたでしょう・・・。しかしこの話は、今まで、仲良くやつてきたクラスメイトと修学旅行で殺しあつてしまつという、悲しくも、残酷な話である。

つかの間の平和（前書き）

中学生たちが、異世界に迷い込んでしまう話・・・。

”AMIDA”それは、一度入つたら最後・・・。
99%の確率で、死んでしまう。

もしあなたが、”AMIDA”に迷い込んだときのために・・・
この小説をあなたにわざります。

つかの間の平和

村立鎌谷中学校。富山県五縄村という、山奥の小さな村にある、創立30周年を誇る村立中学校である。

この学校は、総生徒数が、345人の学校である。

「キーンゴーンカーンゴーン」チャイムが鳴り響いた。

俺の名前は、高田武士。たかだ たけし 3・4のスポーツ万能男だ。

6月18日（木）今日は、3年生の修学旅行前日指導の日。「えー、では皆さん、今日は早く帰つて、十分睡眠をとつて、明日からの、2泊3日の修学旅行に備えてください。」

校長先生の話が終わり、3年生は帰宅した。

初夏の暑さが、俺たちの体力を少しづつ奪つていく。

桜庭が話しかけてきた。

「なあ、修学旅行で、朝とかに、キャッチボールやらない？」

桜庭とは、俺の親友で、同じクラス。

フルネームで、桜庭友司さくてい ゆうじ と言つ。

こいつとは、幼稚園の頃からの大親友で、とても仲が良い。しかし、小学校高学年になつてから、桜庭は急激にモテだしたわけで、

とても羨ましい。

「おお、いいねえ！ やろうぜ！」

桜庭とは同じ、野球部で、俺はエース、桜庭はショートだ。

「グローブとボール、牛島に見られないよ！」

牛島とは、俺らの担任 兼 野球部顧問。

昔の学校にいそうな、現代の女子に嫌われやすい熱血教師だ。

フルネームは、牛島義則うじじま よしつのり

「ああ・・・そうだった・・俺らの担任牛島だつた・・・。俺は、少しため息をついた。

「何ため息ついてんだよー俺たち同じ就寝班なんだから元気出せよ

！」

あ、そうだった・・・

そう思つと、俺は少し元気が出た。

「あつ、もう家の前か・・・。」

桜庭の家は、学校まで歩いて10分と、かなり近い。

「じゃなーまた明日ー・・・遅れんなよ。」

「わかつてゐよーじゃ、また明日。」

「ああー。」

バツタンードアが閉まった。

ふうつと、俺はひとつため息をついて、家へと帰った。

何故か、今日は眠い。今日は、かえつたら、すぐ寝よつ。

「ただいま。」

「おかえり。」

母だ。

「武士ー、明日着てく服、どうがいい?」

あ、もひどいちでもいいから早く寝させてくれ。

「・・・」
ち。で、そつちは次の日着るよ。」

「一そうね。それがいいわ。」

「で、俺もう寝たいから、風呂入るよ。」

「あらそう。でもお風呂沸いてないわよ?」

「じゃあ、シャワーでいいよ・・・。」

俺はさつさとシャワーを浴び、コップ1杯の
プロテインを飲み、布団に潜り、

すぐに深い眠りについた。

つかの間の平和（後書き）

まだ話の最初です。まだ、何か分からぬでしょうが、
これから、あなたのために、書いていきます。
あなたが、”AMIDA”に迷い込まないようこ、
次話の前書きに書き込んでおきます。

悪夢の始まり（前書き）

あなたは、修学旅行に行つたことが何回ありますか？

あるいは、旅行に行つたことが、何回行つたことがありますか？まだ行つたことのない人、これから、旅行に行く機会のある人、そんなときは、”4”の数字や、Aのついた乗り物には、乗らないでください。

まして、この小説を見て、乗ろうとしないでください。

”AMIDA”に、引きずり込まれますよ。

そして、本当に死にますよ。これは警告です。

多く狙われるのが、バスです。

とくに、トンネルに入るバスには気をつけてください。

悪夢の始まり

チユン、チユン。

「・・・ふあ———・・・。」

日の光がまぶしい・・・朝か・・・。

今は何時だろう・・・。

「あつ！ あつ！」

一気に目が覚めた。

AN5-45 集合時間の30分前から、たぬか

罪と皮肉

「ト・ト・ト、お嬢さんへ飯代」。

パンを1枚食べ、牛乳を1杯飲んだ。

身支度を終えた頃、母が起きた。

あ・こめい

俺は、あれで何がどうかわからぬ。

残り10分・・・走れば間に合うな・・・。

「いや、しゃい。気をつくるのが、楽しんでもらなさい。」

ザフザフ

「遅いなあ、武士。まさか、寝坊したか・・・?」

はあ、はあ。間に合ひた！！

「ぎりぎりセーフ！！あぶねー！」

「セーフじゃない！完全アウトだ！ボケ！」

「イテツ！」

でた、牛島のゲンコツ。昔の映画などよく見ゆやつだ。

「スス、スンマセン！！」

「まったく、本當にお前つてやつは・・・」

「えー、それでは、生徒はバスに乗つてください。

1組は1号車、2組は2号車、3組は・・・」

「・・・ほら、さつあとバスに乗れ！」

「はーい。」

ナイス、学級委員長！！

「高田つて、ホント馬鹿だよねー。」

「むつ。」

今、話しかけてきたのは、

内田涼子

俺のタイプで、かわいいが、好きになれない。

しかも、喧嘩強い、女子のリーダー。人氣者で、頭も良い。

「つるせー、黙つてう。」

「ふんつ、あんた、あたしに勝てるの？」

実のところ、俺は、こいつに勝つたことがない。

「ンだと、てめえ！やんならやんぞ！」

「いいかげんにしないと、ぶつとばすぞ、高田・・・。」

「何故、俺だけ！？」

「いや、先生、こいつが先に・・・」「

ゴツッ！

「こつてえええ！－！」

さつきより痛かつた。

「早く乗れ！－！」

「はい・・・。」

俺は、頭をさすりながら、バスに乗つた。

「はい、風邪で休みの堀口龍君以外、みんなのりましたね。じゃあ、

出発しまーす。」

「ちくしょう、こいつときだけ態度変えやがつて・・・。」

内田は、学級委員でもある。

かくして、俺たち生徒39人と、教師1人を乗せたバスは、
AM 6:30 に出発した。

悪夢の始まり（後書き）

”AMIDA”には、
本当に気をつけてくださいね。

悪夢の始まり（2）（前書き）

修学旅行バスに乗り込んだ、3・4一同。
長いトンネルに入り、恐怖体験をすることになる。

悪夢の始まり（2）

AM7：30 クラスレク開始。

「えー、では、クラスレクを始めたいと思います。」

眠いなあ、クラスレクめんどくさいから、寝ちゃおつかな。
でも、寝たら隣の内田に殴られるしなあ・・・。

「最初はクイズです！」

クイズか・・・適当に2、3問答えて、内田に、気分が悪くなつた、
とでも言つて、前の席に移るう・・・。

「第1問、次のうち、ネコ科の動物を選んでください。

1、ブラウンキャット 2、トラ 3、ファグナー

「はこつ！――

「じゃあ、高田君。」

よしそれ。

「トラ！――

「せいいか～い。」

これは簡単すぎだつたな。

「第2問、去年のプロ野球の 球団の監督は誰だったでしょうか？

1、飯島 2、レオナシー 3、沢村

よしそれ。ラッキー！

「はこつ！――

「どうぞ。」

「3の沢村平治監督だ！」

「はい正解！」

よしそれ、得意分野で良かつた！
わあ、もういいか、言おつか。

「う・・・内田・・・。」

「ん？」

「気分が・・・悪いから前行つていいかなあ？」

「ダメ。」

「え・・・？ なんで・・・？」

「あんた、そんな嘘ついて、寝たいだけでしょー?」

何故バレた！？

「な・・・なんで嘘だつて言えんだよ・・・。」

「だつてあんた、ついさっきまで大声出してたじやない。」

「きゅ・・・急に気分が悪くなつたんだよーー。」

「へえー、急にねえー・・・。」

「なんだよ、ほ・・・本当だつてーーー。」

「・・・必死ねえ・・・あんた。」

「な・・・何言つてんだよ！違えよーーー。」

「なんだ、そんなにおつきな声だせるんだあ・・・。」

氣分が悪くてもお。」

「あ・・・。」

しまつたあああ！！

「嘘ついちゃだめだよ高田君ーー。」

「いつて！」

手の甲をつねられた・・・。

AM 8:30 クラスレクも終わり、自由時間となつた。部活の疲れが取れていないやつ、寝不足のやつは、皆、寝てしまつた。

・・・隣の内田も寝ている・・・寝顔もかわいい。

しかも！俺の手を握つている！いきなり握つてきたから、氣でも狂つたかと思つたぜ・・・。

こんな、うれしい寝相をうつならいつも授業中寝てくれよ・・・。でも、誤解されるとアレだから、俺はしぶしぶ、手をビカした。俺も寝よう・・・。

ね・・・眠れない・・・。
くそー、眠いのに・・・。

「ん・・・。」

「おひ。」

内田が起きた。

「よう、起きたか。」

「あ・・・寝ちゃった・・・。」

ザワザワ。

「ふあ〜〜〜。」

「よく寝た〜・・・。」

・・・!?

「み・・・皆起き始めた!?」

このトンネルに入つてからだよなあ・・・?

「変だなあ・・・。」

AM10:07 トンネルに入つて30分が経過した。

おかしい、絶対おかしい。

こんな長いトンネル、この付近にはないはず・・・。

この奇妙さに全員きずいている。

「なあ、おかしくない?」

「うん・・・もう30分も経つてるよね・・・。」

「もしかして、このまま出られないの!?」

「ちょっと、ふざけないでよ!!」

「ね・・・ねえ・・・前のバスいないんだけど・・・。」

「う・・・運転手さんいつからか知っていますか!?」

「いや、いつのまにか・・・。」

皆、騒ぎ出してしまつた。

俺も不安になつてきた。

「静かにしろ!!--」

牛島先生・・・・・

「騒ぐな！大丈夫だ！もうすぐ出口だ！静かに座つてろ！」

そう言つて、牛島先生は、座り、黙り込んだ。

それから、皆も何も言わなくなつた。

それから10分後—

AM 10:19

かなり前方だが、かすかに光が見えた！

「お・・・おい！出口だあ！」

ドッと、歓声が沸いた。

女子も男子も、何人か泣いている・・・。

そのうちの、1人が・・・俺だ・・・。

「まつたく、男なのに情けないなあ。」

内田ああ！そんなに大きな声で言つなあ！

「ば・・・か・・・やろお」

俺は小さな声で言つた。

ついに、トンネルから出た！

だが、トンネルを抜けた、その先にあったのは、
とんでもない世界のだった・・・！

懸夢の始まり（2）（後書き）

第3部終わりですっ！
いやあ、つかれました！
これからもどんどん書いてこきままでの
みうしくお願ひします。

ゲームスタート（前書き）

長いトンネルから抜けた3・4一同。
そこに待っていたのは、
謎の主催者XXX！
最悪のゲームが始まる・・・！

ゲームスタート

ついにトンネルから出た！

「やつと・・・出れたあ～！」

そう、俺たちは、やつとトンネルから出ることができたのだ。

「！？」

「あれ！？」

何か変だ。

「こんなところ、あつたの？」

「運転手さん・・・」

「う・・・うわあ！！」

運転手さんが、口から大量の血を吐いて、死んでいた！

「し・・・死んでるう～！！」

再び、バス内が、パニックになつた。

「牛島先生！～どうすれば・・・！」

「と・・・とりあえず、俺が外見てくるから、
お前ら、バスから出るなよ！」

「！？」

先生が、”俺”と言つた・・・？

いつもなら、”先生が・・・”と言つてゐるのに。

先生も、かなりあせつてゐる・・・？

「怖いよー」「どうすんだよー」「死ぬの・・・？」

ああ、また・・・。

ザワザワザワザワ！

「・・・静かに待つてろ・・・！」

先生・・・無理だよ・・・

この状況で、大丈夫でいる中学生なんて・・・。

「うわあーーー！こんなのやだあーーーー！」

「西村！？」

いなことですよ・・・。

「ま・・・待て！西村！！」

パン！

銃声が鳴り響いた。

西村が倒れている。

「西村・・・？」

「いやあ―――！」

西村が撃たれた。

そして、どこからか、声がした。

「よつゝわ。皆さん。」

「！？」「

「だ・・・誰だ！」

牛島先生が叫んだ。

「僕の名前はエックス

「エックス」

「そこの・・・西村君・・・？だつけ？
心臓撃ち抜いたからもう死んでるよ。」

「な・・・なんだと！――――！」

「いやあ―――！」

パン！

また銃声が・・・。

何かが、顔にかかつた。

・・・血だ！

まさか・・・！

「うわあ！」

「ヨーコオ！！」

辺りに血が飛び散っている。

「静かにしないと、彼女みたいにするよ。」

「・・・・・！――！」

「黙つて、僕の指示に従いな。」

「まず最初に場所を変えよう。」

「」

キイイイイイイイ。

耳が痛くなるような高音！

「・・・」は・・・？

いつのまにか、場所が変わっていた。皆もいなくなってる・・・！
後ろ、左右とも壁で覆われ、ただまつすぐな直線が前にある。

「じゃあ、君たちには、これから、ゲームをしてもらつ。」

「説明をするよ。いまからやつてもらうのはサバイバルゲーム、簡単に言えれば”殺し合い”をしてもらつ。」

「ちょっと待てよ！何で殺し合いなんか・・・！」

隣から聞こえるこの声は・・・亮！やめろ！よせ・・・、

パン！

ドサッ！

亮・・・！

「黙つて聞いてれば良かつたのに・・・。」

くそ・・・！

「君たちの前に果てしなく続く道があるだらう？
その道を進むんだ。そして、曲がり角に突き当たつたら、
必ず、曲がるんだ。そして、曲がつたら前に進み、
人と出会つたら、殺しあつてもらう。」

こない場合は、待つてもらつ。

最後まで残つたものが勝者。

現実世界に帰ることができる。

もし殺しあわなかつた場合、どちらかを僕が殺す。

いいかい？」

何も言えない・・・。

「この世界の名は、アナザーワールド・アミダ（別世界・アミダ）

そしてこのゲームの名前は、”AMIDA”だ。」

・・・あみだ・・・？

「君たちも、僕の説明を聞いて、何かに似ていると思つたら？

「そう、あみだだよ。」

「・・・さあ、そろそろゲームを始めよ。始まつたり何言つてもいいよ。」

「ああ、そうそう、武器は右の壁のボタンを押せば出てくるから。」

「そして、自殺もできないようこじたから」「安心を・・・。」

「では、開始!」

「そうして、生き残りサバイバルゲーム、”AMIDA”が始まつた。」

ゲームスタート（後書き）

ついに、始まつた！

生き残りサバイバルゲーム”AMIDA”！！

一体、何の目的でこんなことを・・・？

最後に生き残るのは誰だ！？

不安な一日目（前書き）

ついに始まつた、AMIDA！
誰が生き残るか・・・不安になる・・・1人・・・。
高田たちはこんな苦痛に耐えられるか？
そして、ついに高田が・・・！？

不安な一日Ⅲ

何故こんなこと……

そうだ！これは夢だ！夢に違いない！

俺は自分の頬を思いつきりつねつてみた。

痛い・・・頬が痛い・・・。

「夢じやない・・・！」

アナザーワールド”AMIDA”だとぉ！？

「ふやけんなよ…」

SFなんて、テレビとかでしか見たことないぞ！

「夢じや・・・ない・・・。」

・・・そういえば、生き残ったやつが現代に戻れるって言つてたな・
・・・。

本当に殺さなあや・・・いけないのか？

今まで仲良くやつてきたやつらだぞ！？

親友の桜庭や内田もいるんだぞ！？

どうすればいいんだよお・・・！

俺の精神状態は今、不安定だ。

・・・まで、落ち着くつ。

殺らなきや殺られる・・・。

殺つて、生き残つてもその後どうなるかわかりやしない。

どつちにしり今、俺たちは、弱肉強食の世界にいることは確かだ・
・。

殺らなきや殺られる。

なら、悪いが俺は、殺る！

皆、悪く思つなよ！

そういえば！

「俺の武器は何だ？」

俺は、やつに言われたとおり、右の壁のボタンを押した。

シユンツ！

何かが俺の横に現れた。

・・・机・・・?

その上には・・・。

テレビ！？

「は？」

ふざけんなよ！

「きゅ・・・90年型・・・ワイドテレビ・・・？」

冗談じゃねえ！

パチッ！

「！？」

テレビがついた？

「ガアオオオオオオオオオオオオオオ！」

何か、おぞましいものが映つた！

「うわあああ！」

ブツツン！

切れた・・・。

ヒラ・・ヒラ・・・。

「ん？」

紙が落ちてきた。

「・・・説明書・・・かな、これ？」

紙にはこう書かれていた。

この武器は、かついで持つていつてください。

ピンチのとき、あなたを助けます。

なんだか、この気持ち・・・。

なんか・・・じつ・・・、

すっげえ殺意が沸いた。

「こんなんどうしようと？」

この武器を信じるか？

ええい、行くしかない！

・・・この武器で・・・？

すぐ死ぬかも俺・・・。

こうなつたらやけくそだ・・・！

俺は、まっすぐ続く道を歩み始めた。

3時間後・・・。

「はあ、はあ・・・。」

前に、曲がり角が見えた！

来ちました・・・。

「ええい！いまさら何を考えているんだ！」

俺は、ゆっくり曲がり角を曲がった！

待っていたのは・・・。

「の・・・野本！」

野本翔。

サッカーボーの背の低いキーパー。

身軽なやつだ。

「よう、高田あ。」

「悪いが死んでもらうぞ・・・！」

「ふつ、そのテレビでかよ！」

ちつ、俺だつてもつと良いのが・・・。

「悪いが俺も死ぬのは嫌なんでねえ。」

「！」

「お前の武器は・・・！？」

「見てわかるだろう？」

「は・・・ハンドガン！！」

何だこの差は！？

「悪いな・・・。」

パン！

ああ
・
・
死んだか？俺
・
・
。

•
•
•
?

あれ？

はずしたか？

〔二〕

俺は
おでるおでる
顔の前のテレビに隠れながら
野本を覗き込
んだ。

「な・・・なんだよそれ! おい・・・高田!」

1

テレビを指差している・・・?

あ
もし
か
し

卷之三

「中華書局」

۱۰۰

カチツ、カチツ！

「た
・
・
・
弾が
・

チヤンス！

「悪いが、

「ひいいいいいいいい！」

俺は、野本を追い詰め、おもむろにテレビをつけだした。

「すると 黒い手が出てきて、黒本をつかみ、テレビは連れ込んだ!

俺は
おそるおそる画面を覗き込んでみた
その瞬間！

電波が悪いときの画面だ
・・・。

「ぎゃああああああああ！」

「わっ！」

中からの野本の叫び声が聞こえた！

ブツン！

「・・・切れた・・・。」

するとテレビの中から、何かが飛び出た！
ベチャツーと、音を立て、落ちたものを見ると、
ぐちゃぐちゃになつた肉塊があつた！

「うひ・・・！」

俺は、吐いてしまつた。

おそらくこれは・・・

野本だ・・・。

するとわらわの画面は、ショレッター！？
人間をミンチにするテレビなんて・・・聞いたことないぞ？
俺はすごい武器をもらつたのかもしれない・・・。
もしかして、わらわ弾があたらなかつたのは、このテレビのおかげ・
・・？

なんとなく、この武器（？）の使い方が分かつた。

やけに疲れた・・・。

クラスメイトを殺してしまつた・・・。

ああ、なんなんだよ！このゲーム！

夜・・・。

そういうえば、こりは腹がすかない。

「好都合だ！」

それより・・・。

「こんな世界にも、夜はあるんだ・・・。
星があちこちでキラキラ光つてる。

「きれいだなあ・・・。」

「・・・今何人が生き残っているのだろう・・・?

桜庭は、内田は、先生は、皆はどうなつただろう・・・?

・・・?

「星が消えてる!?

そして、止まつた。

俺は星の数を数えてみた。

16・・・20・・・24! 24個?

もしかしてこれ・・・残りの人数を表しているのか!?

そしたらこれ・・・今日でもう、16人死んだってことじゃないか

!?

じゃあ、桜庭たちはもしかして・・・?

不安な気持ちのまま、俺たちの一日目は終了した。

残り人数：24人

不安な一日目（後書き）

ついに高田が、殺つてしまつた。
並みの中学生がこんなことをして平氣でいられるはずがない！
これから、どうなる！？

再開そして永遠の別れ（前書き）

再開、別れ・・・。

こんなことになってしまった・・・・。

再開そして永遠の別れ

”AMIDA”～2日目～

「・・・・・。」

「ああ・・・うん・・・。」

太陽がまぶしい。

「朝か・・・。」

「ここは・・・ああ、そつか、やつぱり夢じやなかつたか・・・。
昨日は、エックスの言つたことを思い出しながら、不安を抱きながら眠りについた。

この世界の太陽は、少し変だ。
でかい。ちょうど、目の前に野球ボールを置いたときの大きさだ。
熱くはない。ちょうど良いくらいだ。

「さて、行くか・・・。」

俺は、武器（TV）を持って、前に向かつて歩き始めた。
途中で、俺はいろいろ思つてしまつた。

家族に会いたい・・・母は元気か？

他の組はどうなつた？いつ帰れるんだ？

・・・どれにしろ、生きなきゃわからない。

生き延びよう・・・生き延びてエックスの正体を暴き、自由をつかみとらう…

皆も同じ思いだろう。

昨日は助かつたが、もし、この武器が使えなくなつたら、確実に俺は死ぬ。

これから、生半可な気持ちで進むのはやめよう。他の事を考へないようにしてよう。

俺は、そう決意した。

「ふう、着いたか・・・。」

2度田の曲がり角。

「さあ、誰だ！」

曲がり角を曲がったその先には・・・。

・・・・誰もいなかつた。

「まだ来ていなかつたのか？」

「来るまで待つ・・・か。」

面倒なルールだなあ、と思つた。

それから、10分ぐらいしたころ、人が曲がってきた。
誰だろう？武器はなんだろう？まあ、いい。悪いが・・・。

「悪いが死んでもらうぞ！」

「そ、その声は・・・高田？」

この声は・・・！

「う・・・内田！――」

内田が生きていた！良かつた！

「内田！無事だつたか・・・。」

「来ないで！――」

！？

「ど、どひした急に？」

内田の体が震えていたように見えた。

「言ひてたでしょ！？殺しあわない場合どひからかが死ぬつて――」

「・・・・・・！――」

俺は、唇を噛み締めた。

「おねがい！私を殺して――」

「そういやあ、お前武器は？」

「・・・メリケンよ。」

「メリケン！？お前それでよく――」今まで・・・。」

内田は少し下を向いた後、泣きながら言つた。

「杏子に会つちゃつたの！それで、私、私・・・。

「私、大親友の杏子を・・・！――」

そう言つて、内田は手で顔を隠して泣き始めた。

「もういい、もう何も言わなくていいよ…………」
しばらく、沈黙が続いた。

「なあ、内……」

「お願い！早く殺して！」

「そんなことができるかよ！？」

「はやく！」

「無理だよ！内田を殺すなんて、俺には…………」

「高田…………？もしかして…………？」

「やべ！ばれたか！？」

なら、この際はつきり言ひつか…………

「そうだよ、俺は…………」

俺は、お前のことが好きなんだよ！悪いか！

小学校のころから気になつてた！今、好きだとこいつことに気が付いた

！」

それから、数秒、内田は、目を丸くしてこいつを見ていた。
しかし、すぐに笑顔になり、言ひた。

「ありがとう。高田…………」

内田…………。

その瞬間。

「ガアアアアアアアアアアアアアア…………」

「！！」

こんな時に！！

しかし、気付いたときには内田はつかまつっていた。

「内田あ…………！」

「高田、私も好きだったよ。今まで楽しかった！ありがとう。」
最後に、内田は、そう言ひて、笑顔のまま…………。

ギュン！

引きずり込まれた。

「内田あああ…………！」

ザアアアア！

「ああ・・・」

ドチャ！

肉塊が・・・！・！

内田あ・・・・・

内田を殺してしまった！

余計なことを考へないと決意したか

卷之三

このテレビ!!! このテレビのせいだ!!!!

御批欽定四庫全書

心を新たにし、前に歩み始めた。

田中 謙

そして、その日の夜。

俺は泣きながら眠った

残り人数：10人

再開そして永遠の別れ（後書き）

段々と、男らしさを増していく高田。
やつと芽生えた恋は、はかなく散る・・・。
内田との別れで、高田が得たものとは・・・?
次話もお楽しみに。

忘れていた存在（前書き）

今回の話は、記憶力のある人、この小説を、
よく読んでくれている人なら、
今回出てくる、ある人が、だいたい予想はつくでしょう。
さあ、第7部、見てください！

忘れていた存在

3日目、朝。

「う・ん・・・。」

3日目の朝を迎えた。

「ん・・・?なんだ?みずたまり・・・?」

みずたまりがあり、顔がぬれて、目の辺りが乾いている。

「涙・・・?」

昨日の涙が、溜まっていた。

「こんなに涙つて出るものなのかな?」

不意に、内田のことを思い出した。

私も好きだった。今まで楽しかった。ありがとう・・・。

その言葉が、頭から離れない。

それを、思い出すと、涙が出てくる。

昨日の夜は、5・6回は大泣きした。

しかし、今は泣けない。涙が枯れたといつことか・・・。

もう、内田のことを、余計なことを考えるのはやめよう。

先へ進もう。・・・俺つて、決意弱いな・・・。

「長いなあ・・・。もう2・3時間歩いてるんじゃないかな?」
長く続いている道を、テレビを持ちながら、たびたび休みながら、歩いた。

やつと曲がり角に着いた。

「やつと着いたか・・・。」

田は、もう、真上にある。

「さて次は誰だ?」

しかし、誰もいない。

「まだ来ていないのか・・・?」

そして、よく目を凝らすと、遠くに人が倒れている…あれは…

「う、牛島先生…！」

「…・・・・・。」

「先生ビリじたんですか？」

「…・・・・・。」

「誰に、誰にやられたんですか！？」

俺がそう問うと、見慣れた行動を始めた。

「野球のサイン！？」

先生が俺に、何かを必死で伝えようとしている。

「バット・・・で・・・あ・・・ぐられ・・・て・・・。」

バットで殴られたんですか！？

先生はコクツと頷いた。

「まさか・・・そいつって・・・・・、

桜庭ですか！？」

先生は「ああ」と、口を動かし、
かされた声で言った。

「・・・やつは・・・死んでる・・・かもしだん・・・。」

「何でですか！？」

「・・・やつは・・・俺を殺さず行つた・・・。」

「あーで、でも・・・。」

「高田あ・・・もし・・・ぐふつ！おええ！」

「先生！もういいです！しゃべらないで！」

「ああ、良かつた。俺はもう死ぬ。桜庭は生きているはずだ・・・。」

「しゃべらないで下さい…！」

「ふふつ・・・いい・・・じやないか・・・もつすぐ死ぬんだし、

最期まで、

お前と、話させてくれよ・・・。」

「先生・・・。」

「高田・・・頑張れよ・・・ああ、お前の三振を取った時のあの、

見てるこいつが恥ずかしくなるような決めポーズ・・・。」

先生が涙を流し始めた。

「もつと・・・もつと見たかつたなあ・・・！」

お前らが成長するのを、もつと・・・もつと見ていくたかつたなあ・

二〇〇

も、と一縦に。。。野球をしたか？ たなお！

笑顔を見たか

古文二葉の実

先生死乃方に

ガクンツ！

「先生！」？

T

先生

俺は、手を合わしたあと、先生に一礼し、その場から立ち去った。
迷つたら、前へ進め。

これは先生がいつも口にしていた言葉だ。

先生…僕は絶対、あなたのこと忘れません…！」

「桜庭め・・・死ぬつもりか？生きようとする気はないのか？」

卷之三

いや・・・あいつの一か八かの賭けかもしけないな・・・。

ふう、今日はなんだか、目が痛いなあ。

・・・泣きすぎか・・・。

力アン！

金属音がした！

ドスツ！

「ぐああ！！」

寝転がっていた俺の、脇に何かが、当たった。
激痛が走った！

「い・・・てえええ！－！」

ぼ・・・ボール！？

「武士！立て！」

この声は・・・！

「桜庭あ！－！てめえ！－！」

「武士！生き残つたやつが分かつたぞ！－！」

「なにい！？」

「生き残つたのは、俺とお前と、国塔大輔じくとうだいすけと、浩次ひろつだつてよ。」

「浩次！？浩次が生きているのか！？」

元木浩次、俺の恋女房もときいじゅうじゅう

「でも、お前が何でそんなことを・・・？」

「エックスから聞いたんだよ！－！」

「な、何！？」

俺も聞けばよかつた・・・

「そこでだ、俺は今から、お前と・・・。」「わかつた。」

「・・・今までありがとうございました・・・武士・・・。」

ブン！！
ガツ！

「うわああーーー！」
腕が折れた・・・か？

「武士！！」

「おいおいー心配なんかすんなよー！続けれーーー！」

ブン！！

今度はうまくかわせた！

「つ・・・・・やべ・・・・・！」

今だ！

テレビを持ち上げ、桜庭の目の前に差し出した。

「グウオオオオオオオオオーーー！」

よし、きた！

「悪いな・・・その武器は、牛島で攻略済みだー。」

「何！？」

ガスツ！

ゴツ！

バキ！

「ギヤアアアアアアアアーーー！」

「な・・・・！？」

怪物が戻つていく・・・？

「な、こいつって、本当は弱いんだぜ！ 知らなかつたうつー？」

「なんだと！？」

「だとしたら俺、勝ち目ないじゃん・・・！」

「武士！ 苦しまないようになつてやるー！」

「まだ死ぬわけにはいかねえんだよー！」

ブウウン！

「！？」

「またテレビがついた！？」

「グオオ？ グ・・・ゴアアアアアアアアアアーー！」

さつきより、でかい手が出てきた！

ギュアア！ ガシッ！

「う・・・くそ・・・速い・・・！」

まさかこいつ・・・親！？

しかも、俺の意志で動いてるのか、こいつ？

俺が思つた通りに動く・・・。

「く・・・動けない・・・！」

「そうだろう、こいつは、俺の意志で動くみたいだぜ？」

「・・・そうか。死ぬのか俺は・・・。」

桜庭は、涙を流し始めた。

「あ、そうだ。俺もこんなことしたくないが、仕方ないんだ・・・。

「あ・・・じゃあ、最後に教えてやるよ。」

「何をだ！？」

「エックスはなあ、俺だけに、教えてくれたんだよ・・・。」

「だから何を！？」

「生き残つたやつは助かるつて言つてたのは、覚えてるな？

「あ・・・。」

「これは嘘なんだつてよ。」

「！」

「なんだって！？」

「いや、嘘じやないけど……」「うん……」

桜庭は少し目をつぶつた後言った。

「生き残れないってことらしい……。」「

「どうゆうひことだ！？」

「最後まで生き残つても、エックスの前に、”ダーク・デビル”と

か言つ、

”AMIDA”最強のモンスターがいるそうだ……。」「

”AMIDA”最強！？」「

「そうだ……。」「

「……そんなの、やらなきゃわからんねえだろー。」「

ははっ、武士じいな……。」「

「桜庭……。」「

「おい、といひで、お前、気づいてたか？」「

「なにを？」「

「エックスの声、聞き覚えないか？」「

「え……え」と？」「

「ふう……堀口龍だよ！」

「あ！ そう言われてみれば……。」「

「あいつ、風邪で休んだろ。」「

「あ！ そうだつけ？ 気づかなかつた！」「

「お前……そりや、かわいそつだぞ……。」「

「でも、なんであいつが……？」「

やつ言つた直後、どこからか、声がした。

「教えてあげるよ。」「

！」

「おこーお前、本当に堀口か！？」「

「ああ、そうだよ。」「

「おまえ、どうやつて……？」

「桜庭君。」

「なんだ？」

「君にはもう用はない。」

「分かってる。秘密をしゃべった時点で、俺の死は確定してるんだろ？」

「その通り。そこまで分かってるなら、もう決心したな？」

パン！

カラーンカラーン！コトツ

「桜庭……！」

「さて、残りはお前だけだな。」

「俺だけ？国塔と浩次は！？」

「ああ、あの二人は、俺は好きじゃないから殺したよ。悪い？」

「てめえ！」

「あいつら、俺のことじめていたろ？他に俺が殺したやつも、俺のことを軽べつしたり……。」

「牛島もか！？」

「そうだよーあいつも俺のこと信じないー！」

「お前……！」

「そこで寝て、一夜明けたら、まっすぐ進め。そここ”ダーク・デビル”

を用意する。夜が明ける前に進んでたら、お前を殺す。

「まで！桜庭はどうするんだよー！」

「ああ、今処分するよ。」

シコーン！

「き・・・消えたー！」

「楽しみにしてるよ。」

「 」

俺 . . . 1人になっちゃった . . . 。

堀口 . . !

「お前こそ楽しみにしていろよ。」

俺は、明日のためにすぐに寝た。

忘れていた存在（後書き）

主催者の正体はなんと、堀口だった！
次話、高田は、ダーク・デビルを倒し、堀口に
会つことができるか！？

（第7部終了）

THE END "AMIDA"

夜明けー

や、行くか。

今田ひで現実世界に戻るー

まつすぐ続く道を、

まつすぐな気持ちで

まつすぐ進んだ。

欲を言えば、話を帰してほしー。

この“AMIDA”的意味も、やつから聞かなきやならない。

俺は、こんなことを胸にしまじま、ただひたすら前に向かって歩いた。

今、この世界にいるのは、俺と堀口だけだ。

到着

「あーーー出でーーこよーーダーク・アビルーー

「ふふふ、やつこひきたね。」

「どうした?」リリは準備OKだぜー。」

「武器はどうしたんだい?」

「武器は、置いてきた!」

「どうしてだい?」

そり、俺が何故武器を持つてこなかつたかと言ひどーー

今朝、いきなり電氣がついて、中から、例の化け物が飛び立ち、その後消滅したから。

「そりちじや、ダーク・デビルを早く出せよ」

「ふふ、わかつたからあせるなよ。バーカ。」

「ちつ、てめえ、ねぼえとけや。」

「これに、見覚えはあるだろ?」

「何?」

「£ ヴ ピーー。」

「・・・何語ですかー?」

「いですよー。ダーク・デビル!」

「最終的に日本語ー?」

ブー・ン。

ル・ル・ル・ル・ル

「一・・・・」
セイタ

「そうだ、テレビの化け物だよ。よし、あいつを殺れ。」

— そ ん な
・
・
・
・

一瞬で俺はやつに捕まつた。

メキシコ・リバビラ

最後に・・・君だけに言おう

۱۰۰

「もしかりに、君が、こいつを倒しても、僕は君を殺していた。」

「これから、僕は、死神ギヤスティアからもらったこの力で、地球

「な・・・。」

を滅ぼす。

君達は、僕のこの力の、練習相手に過ぎなかつた。」

「・・・・・！」

ミシミシ・・・メキ・・・

「ぐああ・・・」

「高田・・・君だけは僕に優しく接してくれた。君がいたから僕は今までやつていけたんだ・・・。」

「じゃあ・・・なんでこんなこと・・・お前が・・・？」

「君だけじゃあ、僕は生きていけない・・・。親からも・・・友からも・・・

先生からも・・・僕は全ての人に見放された。そんな僕を誰が必要とする!?」

「・・・堀口」

「そんな苦しい時にギャステイアから、この力を授かつた。僕はこの地球を滅ぼし、

その後に僕も死ぬ。」

「お前・・・バカだろ。」

「な・・・！」

「お前の周りのやつが嫌だつたんなら、お前が勝手に自殺でもすれ

ば、俺の望む生活が

できたの。』

「なんでおれが・・・。」

「・・・すまん、ここ過ぎた。さ、早く殺せ。」

「・・・・・。」

「どうした?」

「へやー。」

「・・・?」

「やはり、できなー。」

『約束が違うな

』の声は・・・!?

「ギャ・・・・ギャステイア!」

『お前は私の代わりに地球を滅すといったはずだが・・・』

「すまない、ギャステイア。僕にはやつぱりそんなこと・・・。』

『黙れ

』

『そこのお前は筋がいいな……よし……ハツ！』

「グオアアアアアアアアアア！」

「な……ダーク・デビルが……！」

消滅した！

『私と一緒に行かないか？』

そういったのと同時に堀口が現れた。

「く……そ……！」

「堀口！大丈夫か！？」

「ああ……ありがとう……畜生オ！」

死神も現れた。

『さあ、どうだ？ 来ないのか？』

「おれは……」

「……高田」

「……なんだ？」

「君が望む世界……か。（何とか僕の力で）」

「え? なんて言った?」

「こいつの答えはNOだ! さあ、殺してみろ!」

「堀口……。ああ、そうだ! さつさと殺せ!」

『いいだろう、やはり人間などに頼らず、自分の力でやればよかつたな……。』

『フンッ!』

俺達は、大きな光に包まれた。

「う……ん」

『こはどこだ?』

「あれ……こは?」

俺の部屋だ。

「夢……だったのか?」

「お~い! 武士!」

『……』の声は!

俺は、部屋の窓を勢いよく開けた。

「さ・・・さ・・・桜庭あー生きてたのか!?」

「何ねぼけてんだよーほら、さつわとしないと遅れるぞー!」

「あ・・・ああ!」

やつぱり・・・夢だつたんだ!

「ゴメンゴメン!」

「おひせーよーそ、行くぞー!」

ザワザワ・・・

「はいじゃあ、みんなバスに乗つてくださいーー!」

・・・あれ、そういうば堀口はー?..

「はー、じゃあ風邪で休みの堀口君以外・・・」

休み・・・まさかー?..

『心配しなくても大丈夫だよ』

!!

「堀口！？」

「え・・・ええ、堀口君は休みだよ・・・。」「

クスクス・・・

『僕の声は君にしか聞こえないよ』

・・・！

『君はもう死んでいるよ。』

『じゃ・・・じゃあ、何で今・・・』

『僕の力で、君を3日間夢の世界で生かすんだ』

『な・・・一？』

『そう、あれは夢じゃなかつたんだ。もう僕たちの地球はないんだ』

『・・・一？』

『3日間・・・楽しんでね・・・』

『ああ・・・』

『死神に殺された僕たちは、一生の地獄が待つていてる。だから、そ

れまでの間・・・

幸せに・・・僕は、もう捕まっちゃった。君は安全だよ。』

『ありがとう』

1
日
目
•
•
•

修学旅行先で、色々見て回った。

石

ハスレーベル、はしゃべりながら、たくさん遊んで、夜更かしをした。

2011

夜

内田を呼び出した。

「何？話つて？」

「内田・・・俺、お前のことが・・・」

「あ・・・」

「好きです！つべつ、付き合ってください！」

「・・・ひつ、黙んでやんのー。」

」・・・！」

「いいよ、別に」

3日目・・・最終日・・・

個別自由行動で、内田と一緒に見て回った。
とても楽しい。

どうか、終わらないでほしい。。。

そして、夕方。。。

帰りのバスで、富山まで帰った。

家に帰つて、すぐに眠ってしまった。

「もうすこし。。。もうすこし。。。だけ。。。」

。。。。。。?.

真つ暗だ。

何も見えない。。。

動けない。。。

誰か助けて。。。

ここが。。。地獄?

ああ。。。誰かが来た。。。

痛い・・・だが、どこをやられてるのかわからない・・・。

痛い。

ああ・・・。

・・・じこは?

痛みがない?

また誰かが来た・・・。

痛い・・・まだ、どこをやられてるのか・・・。

じこは・・・またか・・・。

もうこりやだ・・・やめてくれ・・・

痛い・・・痛いよ・・・

・・・またか。

もうやめてくれよ・・・

いつまで続くんだ・・・

『一生の地獄が待っている』か・・・。

一生か・・・。

死にたい・・・。

ああ、なんで俺がこんなめに・・・

痛いよお・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5605d/>

A M I D A

2010年11月12日11時32分発行